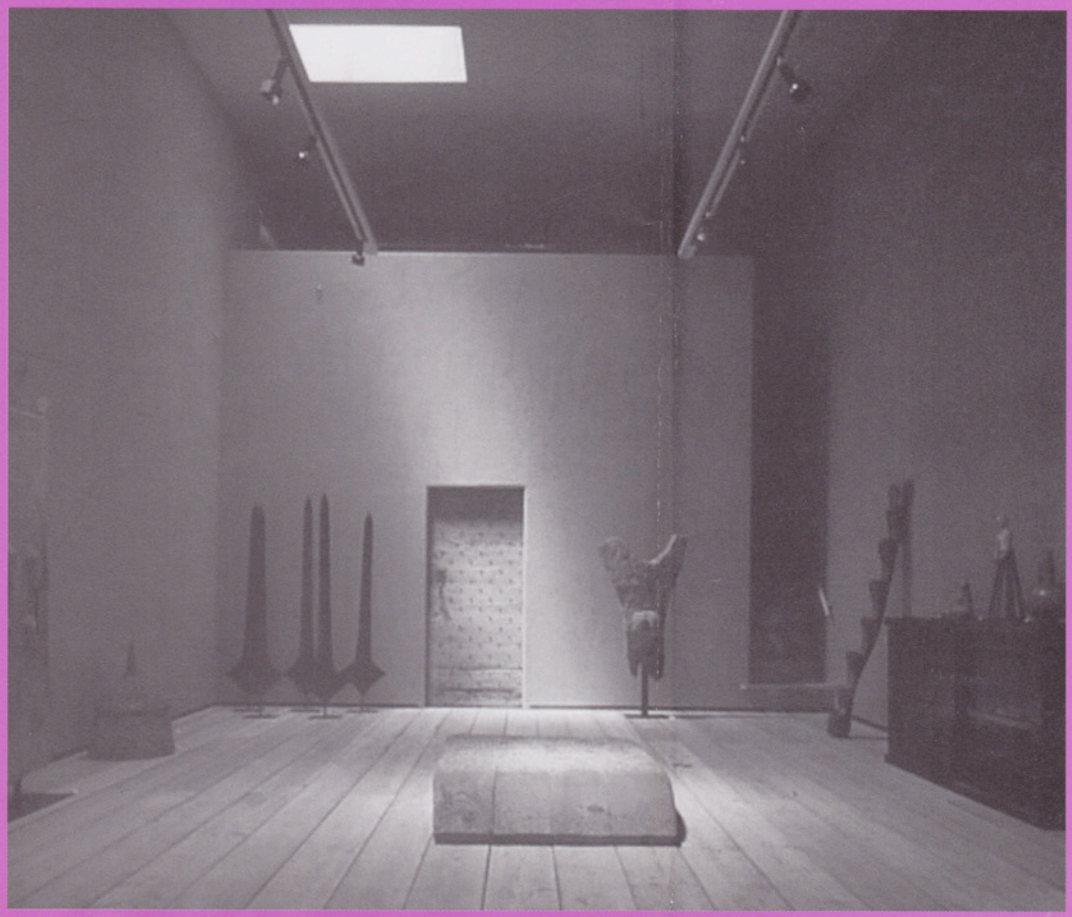
武蔵野美術大学建築学科・日月会

フォルマ・フォロ

Forma-Foro

Nov.1. 2005

vol.6 第6号



目次

フォルマ・フォロ エッセイ
土屋 公雄

インタビュー
中村 好文

卒業生の素顔
佐賀井 尚

VOICES /
歴史を繋ぐ
都市公園をめざして
菊本 譲

製図室 /
博士課程一期生の
活動報告
山内 閑子

表紙写真：
「as it is」1994
写真提供：中村 好文

グライスデール・フォレスト

土屋　公雄　TSUCHIYA, Kimio
武蔵野美術大学客員教授

ロンドンより列車で３時間半、イングランド北西部に広がる湖水地方は、イギリス最大の国立公園である。なだらかな丘と大小の湖のつらなるそのほぼ中央には、9000エーカーの広さを持つ森があり、この森こそ、８０年代世界の美術界に多大の影響を与えた、グライスデール・フォレストである。

グライスデールとは、古代スカンジナビア語で「豚の谷間」という意味で、きっと中世にはオークが茂り、その実を食べる野生の豚が多く生息していたのだろう。

またこの地は、ナショナル・トラストの発祥の地としても知られ、古くからこの魅力的な景観に魅せられた芸術家は多く、ターナーやラスキン、ワーズワースなど、この地で数々の傑作を残している。

１９７７年よりスタートした野外アートプロジェクトは、自然と人間そして芸術が共生する場として、英国はもとより海外からも多くのアーティストを招き、森全体を広大な野外美術館とする計画で、レジデンス型制作・発表の場として、この森の名を飛躍的に高め、８０年代には自然派アーティスト達の国際的な舞台ともなった。

このプロジェクトの最大の特徴は、あくまでも成長し変貌する森が主体であり、作品は森の変遷と共に変化し、最後には朽ちて自然に戻っていく事にある。

森の生態系と共に生きる芸術、そしてそれを見つめる人間、グライスデールは幾度訪れても、新たなる発見を与えてくれる場所である。

いい刀は鞘に入っている

中村好文　NAKAMURA Yoshifumi
5回生　レミングハウス　日本大学教授

中村好文さんは住宅設計，家具のデザインのみならず，芸術新潮などの雑誌に連載ページを持ったり，単行本を出版されたりと多方面で活躍しておられます。今回，ムサビ出身の建築家として初めてインタビューに登場していただきました。若いときの中村さんを知りたいので，ムサビに入る前の事を少しお話下さい。

中村：僕は千葉県の九十九里浜に生まれました。町にコンクリート造の建物がひとつも無いような田舎町で、実家は茅葺き屋根でした。つまり、建築文化とはまったく縁のないところで育ったわけです。高校の３年間は陸上競技部で棒高跳びと三段跳びをしていましたが、自分で言うのも変ですが、優秀な選手だったので、陸上競技の盛んな体育大学などから熱心な誘いを受けていました。でも、合宿所に住み込んで、４年間、毎日ジャージを着て暮らすのもなぁ‥‥と考えて、美術大学に進みました。子供のころから絵を描いたり、工作したりすることも大好きだったからです。

本当ですか、初めて聞きました。棒高跳びは建築設計と何か関係ありますか？

中村：うーん、与条件のバーが高くなるほどファイトが湧くところとか、予算も工期も法規もすれすれで超えることとか、関係あるといえばある。（笑い）

ムサビに入学されたのが1968年、当時のムサビで中村さんはどんな学生でしたか？

中村：入学した６８年は学内は表面的にはまだ平穏でしたが、次の年から学生運動が吹き荒れました。僕もときどきはデモや集会に行きましたけど、もともと団体行動が苦手な上、闘争そのものに疑問を感じていましたので、学生運動に関しては距離を置いていて、大学が封鎖されていた期間は、アルバイトで稼いだお金で日本各地の建築や集落を見て歩いたり、名画座に入り浸って映画を観たり、ひたすら本を読んだりジャズを聴いたりして、それなりに有意義に過ごしました。駒場の民芸館に足繁く通っていたのもその頃です。民芸館ではウィンザーの家具とか李朝の工芸品に魅せられスケッチしたり実測したりました。そんなわけで、ムサビではまともに建築を教わってはいないんですけれど、民俗学の宮本常一先生や文学の保晶正夫先生に出会って、大きな影響を受けました。学生時代はとにかくヒマさえあれば建築の本や雑誌を読み漁っていました。安藤忠雄流に言えば、「建築を

独学」ってことになりますね。たとえば、『住宅巡礼』という本は、そのころ本で見て熱い溜め息を洩らした住宅を、何年か経ってからひとつずつ訪ね歩いたルポルタージュです。つまりあの本の「仕込み」は学生時代だったというわけです。

ムサビを卒業して設計事務所に入られますね。

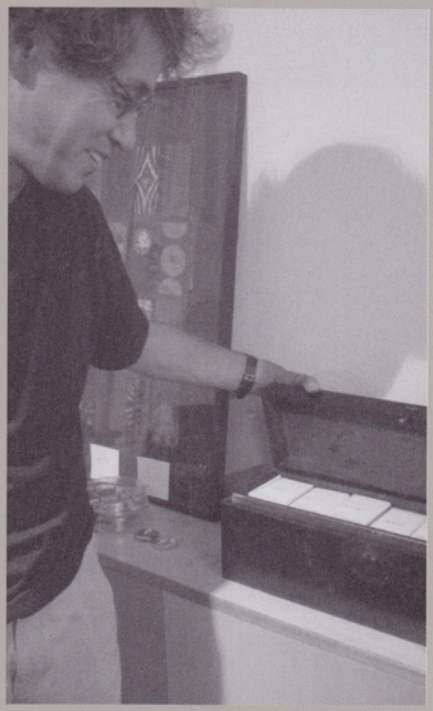
中村：学生時代に積水ハイムの設計で名を馳せた大野勝彦さんのところでアルバイトしていました。卒業間近になって、神田の一誠堂という古本屋の募集が新聞に載っていたので、古本屋もいいかなと思って面接試験を受けたけど落ちてしまった。老舗の古本屋は大学卒は採用しないのです。建築事務所に就職するためにあくせくするのも嫌だし、しばらく建築から遠ざかってみようと考えたんですね。そんな話を大野さんにしたら、「建築を放り出すとはなにごとだ」とこっぴどく叱られ、大野さんの先輩の宍道恒信氏の事務所を紹介され、その設計事務所に3年半勤めて、建築設計の実務を叩き込まれました。

そこから職業訓練校へ行ったのですね。

中村：僕は学生時代から、将来は住宅設計と家具デザインをやろうと漠然と考えていました。普通、建築家は住宅から始めて、だんだん大きな建築をやって、公共建築なんかも手がけて、最終的には国家的なプロジェクトをして「上がり」というのがあるけれど、僕は最初からその方向は目指さなかった。職業訓練校へ行ったのは、いずれ家具デザインをやろうと思っていたからで、やるからには木材というものをきちんと学んでおかなくてはいけないと思いましたし、カンナやノミなどの手道具はもちろん、木工機械も一通り使いこなせるようになろうと考えたからです。

訓練校を終えて吉村順三さんのところに行ったのですね。

中村：じつは、訓練校は終えていなくて中退です。僕は職業訓練校へ行きながら吉村先生に就職希望のラヴレターを出したり、会いに行ったりしていましたが、訓練校に通っていたときに、先生から事務所に来るようにというハガキをもらい、あわてて出掛けて行ったら「君さえよければ、明日から来てもいいんだよ」ということになったのです。いいも悪いもありませんよね、訓練校を中退して、吉村事務所に入りました。吉村事務所では、僕は、吉村先生の家具デザインのアシスタントをしていました。ほかには、先生の方南町の自邸の改修工事や、吉村山荘の雑用などをしていたので、吉村事務所の所員というより、いわば、書生的、居候的な立場でした。で、4年ほどしたころ、先生が大きな病気をされ、なにしろ先生の個人的な仕事の助手ですから、たちまち仕事がなくなって、真っ先に解雇されました。



お気に入りの骨董の箱を名刺入れに

吉村先生のそばで一緒に仕事されて、特に印象に残っている事はどんなことですか？

中村：それは沢山ありますが、なんといっても吉村先生の建築や家具に対する卓越した直感力ですね、それからひとつのアイデアを徹底的に煮詰めていく執念。建築でも家具でも。最初のスケッチやアイデアがちょっと不格好だったり、変だったりしても、それを粘りに粘って良いところまで到達させる執念とその力量。こうやってみたら、ああやってみたらと、しゃぶり尽くすようにやって、途中で絶対に諦めたり投げ出したりしないところが、先生のすごいところです。

吉村事務所を辞めてすぐに独立された？

中村：その時、もうちょっと家具の仕事を続けたいと思ったけれど、日本にはもう働きたいところも、師事したい人物もいなくて、ボローニャで家具デザイナーとして活躍していた高浜和秀さんを頼ってイタリアに行きました。どうせならイタリアで家具デザインの仕事をしたいと考えたのです。当時、イタリアは景気がすごく悪い時期だったのですが、僕は木工機械の扱い方が多少分かっているし、工場の職人に渡す家具の施工図が描けるので、その仕事で良かったら紹介しよう、ということになりました。イタリアの家具デザイナーは、いかにもデザイナー気取りでエスキースをカッコよく描いたりするけど、構造のことを考えたり、製造方法について地道に詰めたりする裏方の仕事をやりたがらないのだそうです。ついては、ファーノ（fano）というところに工場があるけれど、そこで働いてもらうことになる、というので、すぐに行ってみました。ところが、行ってみたら眠くなるような海辺の町で、もともと怠け者のぼくが、そんなところにいたら「絶対、駄目になる」と直感しました。その時、ぼくにとって家具の季節が終わったことを悟り、イタリアで働くことも、そこで暮らすことも諦めて、

帰国して独立しました。
独立されてからの中村さんの活躍は良く知られています。そこで住宅、家具について、少しお聞きします。まず家具について。中村さんは金属はやらないのですか？
中村：金属でデザインした家具もありますが、なんか面白くないんですね、金属製の家具は。木製家具ほど制約がないので、デザインがどうしても恣意的になる、独り善がり的になるような気がする。木を扱っていると木の性質という自然法則に忠実にならざるを得ないので、独り善がりは許されません。木製家具では新奇性や独創性ばかりを狙ったアイデア勝負の家具は成立しないのですが、なんといってもそこが面白い。もともとデザインという言葉は「目先が変わっている」とか「見てくれが斬新である」というような軽率な言葉ではないはずで、無理も無駄もなく、機能的であり、操作性に優れ、過不足なく目的に即していて、価格も妥当、かつ美しいモノ‥‥であって使える言葉のはずです。それにかなっているものだけが「デザイン」という言葉に値すると思うのです。住宅も同じことだと思います。そこに人の暮らしがあるというのが一番大切なことだと思う。そこに喜怒哀楽を持つ生身の人間が365日暮らす、さらに長い年月暮らす。そのことを忘れると建築家の自己満足の仕事に陥ってしまう。
今も出てきましたが、中村さんの住宅設計の考えをもう少し話して下さい。
中村：建築雑誌の表紙を華々しく飾るのは、新奇さやコンセプトを売り物にしたいわゆる話題作ですが、そういう話題性を追い求める前に、まずは、市井の人々の普通の暮らしがまっとうにできる住宅を設計することが大切だし、それこそがやり甲斐のある仕事だと思っています。クライアントにとっては設計料は決して安くはありませんから、その設計料分は満足してもらいたいと思う。居心地が良いとか、使い勝手が良いとか、快適であるとか、美しいとか、愉しいとか‥‥ともかく、そこに住む大人も子供も、理屈抜きに「いい家だね」と言ってもらえる住宅にしたい。その上で、自分の建築的なテーマも溶かし込んでおきたい。いつも、自分自身がその住宅に住むつもりで設計しています。黒沢明の椿三十郎に『本当にいい刀は鞘に入っている』というのがあるけれど、含蓄のある、いいせりふですよね。建築のコンセプトやテーマも刀と同じで「抜き身」では駄目、『本当にいいコンセプトは鞘に入っている』ものだと思います。
最後になりますが、いつも聞いていることなのですが、中村さんから若い人たちに一言。
中村：『ひとつの事を愛し続ける能力を才能と呼ぶ』という言葉がありますが、その通りだと思う。ひとつことを長くやり続けていると、自分ならではの形のようなものが出てくるものだと思います。また、建築を志す人たちは建築以外にもいろいろなことを幅広く、深く、そして真剣に経験することが大切だと思います。その豊富な経験が、いずれは建築を設計する際にきっと役立つようになるからです。
今日はどうも長い時間ありがとうございました。

安曇野ちひろ美術館の「七つの小椅子」1996　写真提供：中村好文

2005年7月12日　レミングハウスにて
インタビューアー：林美樹、須藤和由

2つの賞

須藤　和由　SUDO, Kazuyoshi
6回生　須藤事務所

会員の皆様は既に御存知の事と思いますが、昨年度より、『芦原義信賞』と『竹山実賞』のふたつの賞が創設されました。いずれの賞も、建築学科が主催する賞です。

『芦原義信賞』は建築学科を含め、広く武蔵野美術大学の卒業生、大学院の修了者を応募の対象とし、優れた環境形成に寄与した建築、街並、美術、デザイン、出版などの作品に与えられます。一方『竹山実賞』は、建築学科の卒業生、大学院の修了者を対象とし、5年以内に竣工した建築作品に与えられます。日月会では、会員の作品が賞の対象となることから、『竹山実賞』を建築学科と共催し、会員の皆様からの応募を広く呼びかけています。

昨年度、第1回の『竹山実賞』は、倉本龍彦さんの「山彦さんの家」と更田邦彦さん、岩岡竜夫さん、岩下泰三さんによる「アビタ戸祭」の2作品におくられました。また、『芦原義信賞』は、彫刻科出身の西雅秋さんの「大地の雛型より」におくられました。

今年度も、両賞の応募が始まりました。応募要項の詳しい内容は、建築学科のホームページからダウンロードできます。応募の締切りは、『竹山実賞』は12月12日（月）、『芦原義信賞』は12月24日（土）です。

尚、両賞の授賞式は、2006年3月4日（土）に、武蔵野美術大学新宿サテライトで開催する「建築祭」にておこなわれる予定です。また、表彰式に合わせて、両賞の受賞者によるフォーラムも計画されています。「建築祭」期間中は、学生の作品展示に合わせて、受賞作品も展示されます。

会員の皆様方の両賞への多数の御応募を期待しております。

歴史を繋ぐ都市公園をめざして

菊本　譲　KIKUMOTO, Yuzuru
21回生　東京ランドスケープ研究所

一昨年、青山霊園の新規募集に応募者が殺到したという記事を覚えているだろうか。青山霊園は都市計画公園であり、公園として整備されることが決められた霊園である。昭和35年以降、墓所の貸付けは停止していたが、空き墓所の拡大は進まず、公園化の目途が立たない状況にあった。このため、都では審議会を開き、自然資源や歴史的な人文資源を良好に保全しながら、霊園と公園が共存する空間として再生する方針へと転換した。

その伝統ある霊園をどうデザインに展開するかが私たちに与えられた課題であったが、業務開始当初は霊園と公園の何を拠り所としてデザインに結び付けていくことができるのかが予想できなかった。単なる「荘重、清浄、静謐な空間」をイメージ的に具現化するだけでは、100年の歴史を持つ空間はデザインできない。また、墓所の形式や墓石のデザイン（世の中には墓石を研究する人もいます！）をモチーフにするということも考えられたが、宗教、宗派を特定しない“公共墓地”としてはふさわしくない。そこで、霊園に眠る著名人とゆかりの深い歴史・文化遺産や、周辺の歴史・文化ネットワークからモチーフを抽出することができるのではないかとの結論に至った。例えば、旧乃木邸、迎賓館、旧島津邸、都庭園美術館などがあり、これらの時代を代表するデザイン様式と現在のデザイン様式のなじみやすさを考慮しつつ形にする方針で行うこととした。

今回、そういったデザイン的な検討もさることながら、墓所使用者の意向を反映しながら、墓所移転等により公園空間として確保していく事も苦労の種であった。約26haに及ぶ規模を有する青山霊園には1万4千余りの墓所があり、その墓所に眠る人々の数はその数倍である。一墓所イコール一世帯としても、私の住む神奈川県で言えば三浦半島の葉山町あたりの都市規模以上の数の世帯が関わっていることになる。

あらかじめ全ての使用者の方へのアンケート調査が行われていた。公園化に賛成であるといった肯定的な意見もあったが、死者が眠る場所に手をつけるとは何事だといった怒りの意見も少なくなかった。また、別の事業をもくろんでいるのでは？といった疑いの目を向ける人まである。

このような使用者の意向を一つひとつを汲み上げながら、公園空間として望ましい場所・空間構成との折り合いをつけていく。まるで巨大な再開発をするようなものであり、作業ボリュームとしても非常に多大なものであった。

このような苦労を経て再生の姿を形にしていったわけであるが、これからも長い年月をかけて再生事業が進められていく。六本木ヒルズがオープンし、国立新美術館整備や防衛庁跡地再開発などが進められ、急速に変わりつつある青山の地に、長い歴史や文化、緑とのふれあいの場となり、人々に親しまれる空間に育っていく事を期待している。

青山霊園

快適な「デザイン」へ

佐賀井　尚　SAKAI, Takashi
14回生　尚建築工房

建築の設計をしようと思ったのは、小学校4年の頃だったと記憶しています。両親が家を作ったときでした。20坪ほどの小さな平屋でした。ただ普通の家と違うのは、コンクリートブロック造で作られており、廊下を作らないというコンセプトの最小限住宅でした。父が私を相手にさんざん解説をしてくれたのを覚えています。父は絵が好きで子供部屋の内観パースを描いてくれ、これが自分の部屋かとわくわくした思い出があります。青図（当時は図面のことをこうよんでいました）を開いては、平面図、立面図、断面図、構造図をこと細かく父が説明をしてくれたことを思い出します。母は当時の建築雑誌をいろいろ買い揃え、私の記憶では宮脇壇さんの設計されたブルーボックスが掲載されていました。こんな家があるんだと子供心に感動した覚えがあります。母は建物そのものよりも収納部分を参考にしたかったようですが。

現場も近くであったため、毎日工事現場に行っては職人さんが仕事をするのを見ていました。その家は当時珍しかった断熱材（フェノール樹脂）を使っています。以前住んでいた木造の家とはまったく異なり冬暖かく、夏涼しい家でした。この経験から将来漠然と家を作る仕事がしたいと思い始めたような気がしています。

いわゆる建築家という職業があると知ったのは、受験に失敗し浪人をしていた予備校時代でした。代々木ゼミナールの美術科で初めてコルビジェやミースなどを知り、“ハー、世の中にはいろんな人がいるもんだ”と思ったものでした。そんなことでようやく武蔵美に入りました。

学生時代はどちらかというと武蔵野美術大学ラグビー部建築学科という感じで、ラグビーに明け暮れていたようなものでした。たいして強くもないのに何であんなに楽しかったのかと思うような日々でした。建築学科はよその学科と違い、課題の期間が長いということもあり、毎日グランドを走り回ることができたのかもしれません。

とはいえ、やはり設計課題はやると楽しかったのを覚えています。とくにグループ課題は人によりいろいろな考え方があり、“へー”と思うことが多々ありました。課題の講評も楽しかったことを覚えています。ひとつの課題にこれだけの解があるのかと（あたりまえですが）感心し影響を受けました。　当時私が一番影響を受けたのは、坂本先生の授業でした。先生は “家型”ということを建築雑誌等で言われていました。都市住宅や新建築、多木浩二さんと共著のJAPAN INTERIOR DESIGNなどをわかりもしないのに懸命に読みました。坂本先生が設計課題の授業で「君たちは月に何冊の本を読みますか？」と質問されたことがありました。「雑誌は4冊ぐらい読みます。」と答えたら、先生は「雑誌は本

足利の家　1992

でない。」とおっしゃられて恥ずかしい思いをしたのを覚えています。

武蔵美をやっと卒業して、入所したアトリエ事務所が秋山東一氏が主催するランド計画研究所でした。事務所に入所してすぐにパッシブソーラーの住宅を設計するということなり“なんだそれは？”という感想をもった記憶があります。パッシブソーラーなど全然眼中になかったことを思い出します。卒業したてのころは形ばかりに興味が行き、はずかしながらソーラーなどまったく知りませんでした。このころに今の設計手法を学んだと感じています。やがて奥村昭雄先生が生みの親のOMソーラーに秋山さんも参加することとなり、私もスタッフとして参加しました。OMを理解するために奥村先生の本をなめるように読んだ覚えがあります。

その後独立をし、OMを取り入れた“足利の家”で平成5年度の足利市建築文化賞をいただき、Be-h@usという木構造の新しいシステムとOM、ソーラーウォール、自然素材、環境共生などを取入れて設計をした“小俣幼児生活団”が平成16年度の栃木県マロニエ建築・景観賞の大賞と足利市建築文化賞を再び受賞することができました。

このBe-h@usという木構造システムは秋山東一氏と武蔵美彫刻科の卒業生でもある菅波貞男氏によって生み出されたものです。高強度・高断熱・高気密の木構造システムです。高強度であるということは、これから必ず来るといわれている地震に対して十分な耐力とともに制震をも視野に含めた構造システムです。高断熱・高気密はこれによって初めて計画換気が可能となり、最近の24時間換気に対するひとつの有効な解答と思います。

Be-Airという計画換気システムを小俣幼児生活団にも採用し、緩やかに外気を取入れ緩やかに排気をしています。これは高気密な建物でなければ不可能な換気システムです。この新しい木構造システムを多くの人が利用してくださることを願っています。

学生時代は建物の形ばかりに興味がいき、建物の構造強度、室内環境など2の次3の次と考えていましたが、現在はそれをデザインした上で初めて意匠としてのデザインが生きてくると思っています。高強度・高気密・高断熱な建物がそこに住まう人々の生活の安全、快適さを守り、デザインだけでなく、真の21世紀の建築として成り立つものを造りたいと考えています。

小俣幼児生活団 2004

同級生の眼

河　浩介　KAWA, Kosuke
14回生　河浩介建築設計室

建築科でもラグビー部でも一緒に4年を過ごしました。まわりには運動部に入る人が多く、芸術祭ではどこの店にも建築学科の同級生がいました。そうした訳で彼も教室にいる時間よりグランドにいる時間の方が長かったように思います。グランドと風呂、飲みに行った国分寺くらいしか覚えていないのではないでしょうか。何人かの女性は覚えているかな？

意図した訳でもないのですが、勤めた事務所の親分同士が仲良しで、その後も随分長い付き合いになりました。OMに関わるなかで、住宅の温熱環境の大切さに気がつき、さらにフォルクスハウスで、断熱と気密、Be-h@usで換気の大事なことに気が付くといった過程が今度の「小俣幼児生活団」に結実しているのは勿論ですが、彼の家族や一族が、何十年何百年と丘の上に暮らして来た歴史も大きな影響を与えているように思われました。一緒に設計をした、彼のいとこも、施工した佐賀井の友人も、この保育園の卒園生です。全く新しい土地に全く新しい建物を作るのも大変な話ですが、地縁・血縁・歴史、色々なものを背負ってこそ繋いでいける仕事もあるのだなと思いました。

博士課程一期生の研究活動報告

山内閑子　YAMAUCHI,Nodoka
武蔵野美術大学大学院　博士後期課程

２００４年春、武蔵野美術大学に「造形芸術専攻」を単一専攻とする大学院造形研究科博士後期課程が開設された。近年、造形芸術における表現領域は、専門化し深化する一方、多様化、横断化、複合化へ向かう状況が生じている。この状況に対応する為に、専門性をさらに深めつつ、隣接した造形芸術の領域や関連する学術の成果をも踏まえた連携のもとに、表現や研究をなす人材を輩出することを目的として、開設された。

１９７７年に博士課程が開設された東京芸術大学、２００１年に開設された多摩美術大学に遅ればせながらではあるが、自分のテーマに沿い分野を超えて、多くの先生や研究室で学べることはムサビの博士課程の大きな魅力である。

美容師さんの車椅子

研究内容により、作品制作研究、環境形成研究、美術理論研究の３領域に分かれる。作品制作研究領域は作品制作が中心。日本画、油絵、版画、彫刻はもちろん、映像、インスタレーション、パフォーマンス、音楽といった複合的なメディアによる造形表現も重要な要素として視野に入れた研究活動を行う。環境形成研究領域は、リサーチや理論研究をベースにしたデザイン研究を行う。コミュニケーションデザイン、プロダクトデザイン、クラフトデザイン、空間デザイン、建築、映像デザイン、情報デザインなどの分野が含まれる。美術理論研究領域は、造形芸術領域に関する歴史研究及び理論研究を行う。

現在、一期生は１１人、２期生が６人。その内、約半数の学生が働きながら研究を行っている。毎週木曜４限の必修科目である造形芸術特論の授業時には、７号館４階にある自習室が学生達で賑わう。造形芸術特論では、昨年後期は学外から、多木浩二、安藤忠雄、田中純、他諸先生方をお招きして講義が行われた。世界で活躍する先生方との対話形式の授業はとても刺激的であった。今年は、学内の先生方の講義を中心に充実した授業を行っており、先生方も様々な工夫をされている。

私は、環境形成研究領域に在籍し、“障害者のためのプロダクトから空間まで”をテーマに研究を進めている。論文指導は卒論でお世話になった長尾重武学長、実技は工芸工業デザイン学科の真田日呂史教授の指導を受けている。又、車椅子のデザインを学ぶ為、国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所での車椅子のシーティングクリニックに参加している。現場と大学を行ったり来たりしながら、障害者一人ひとりの特性にあった電動車椅子のデザインを模索する日々である。

◎毎年１月、鷹の台のキャンパスでおこなわれてきた「建築祭」が、昨年から新宿センタービルにある武蔵野美術大学サテライトで、３月に開催されることになりました。時期も場所もとても行き易くなりました。ムサビの建築学科も大きく変わり始めています。それはそうで、建築学科の新入生の親御さんは私よりずっと若い方が多いのですから。
◎先日、11回生の鈴木隆行さんが亡くなりました。あの太い声と豪快な笑い声が聴けないと思うと、とても悲しくまた残念です。(K.S.)
◎以前、私が独立宣言をしたとき中村好文氏から「建築家は楽観主義者でなくてはなりません」という励まし（？）のファックスを頂いた。◎住宅の設計はクライアントのプライベートな部分に踏み込まざるを得ず、さまざまな家族の人間模様の渦中に身を投じなければならない。◎またこの建築と言うものがクセモノで、何年やってもなかなか完成品ができあがらないのである。◎あきらめず、懲りず、続けることを「才能」と呼んで、前進のみ。ありがとうございます、好文さん。
◎次号より編集メンバーが変わり、紙面も新しくなります。ご期待下さい。(M.H.)

フォルマ・フォロ
Vol.6 2005.11.1

編集：林 美樹、須藤和由、椚田祥仁
デザインフォーマット：矢萩喜從郎

印刷：株式会社 帆風
発行：武蔵野美術大学建築学科同窓会・日月会
http: //www.nichigetsu.org
東京都小平市小川町1-736
武蔵野美術大学建築学科研究室内